



諸井先生を偲ぶ

慶松 勝太郎

諸井先生はLEC 会計大学院を愛し、そこでの人との交わりを楽しんでおられたと思います。先生は日本の原価計算論、企業ファイナンス論等の草分けのような方と伺いましたが、私とは専門分野も異なり、先生のご業績がどのくらい偉大であったかはよく存じ上げません。しかし、そのお人柄は誠に敬愛すべきものでありました。私がLEC 会計大学院で仕事をするようになって、大変良かったと思うことの一つに諸井先生とお知り合いになれたことがあります。私がLEC 会計大学院で、そのお人柄を愛した二人の方の一人が諸井先生であり、もう一人が土屋守章先生（東京大学名誉教授、元LEC 会計大学院教授）でした。2018年3月1日に催された諸井先生のお別れの会で配られた小冊子に次のように書かれていました。これは諸井先生の懐旧談の対談ですが、その中に経友会（東京大学経済学部同窓会）の会誌の発行について、諸井先生が「以前は土屋守章先生がいろいろ考えてくれたけど」というご発言があり、また早く亡くなられた、本当に惜しい人でしたとも言われており、お二人の親しい関係がわかります。お二人とも専門分野では大変な業績を上げた方と承っておりますが、全く偉ぶった様子をされることがなく、年下のものともでも本当に対等に話をされていました。

諸井先生と土屋先生の違いをあえて挙げれば、土屋先生の辞書には権威という言葉はなく、興味がおありであれば、二十歳の学生と

でも全く対等に議論され、失礼ながら無邪気ともいえるのに対し、諸井先生のほうは権威がなんであるかは、よくご存じながら、そんなものは無視しておられたところにあるように思います。

それを感じたのがLEC 会計大学院開学後初めての外部評価となる第一回認証評価の時で、先生は何を文科省の役人がつまらないことを言っているのか、審査にあたる他校の、先生から見ればずっと若い教授たちに教育の何たるかが解っているのか、というようにお考えの様子がよくわかりました。またそれだけ、先生にはご自分の教育方針に自信がおありになり、LEC 会計大学院での教育がよいものであると認めておられたものと思います。それはそれとして、認証評価は行われることが決まっておき生殺与奪の権は審査員にあるのですから、ちょっとはらはらした記憶があります。

先生は開学3年目から研究科長でいらっしゃいました。LEC 会計大学院は新しくできた大学院であり、当初はいろいろな先生がおいででした。研究科委員会では、古手の先生方から、私にとってはよくわからない議論がいろいろ出たものでした。しかし、先生は笑顔を絶やさず、決して否定的なことは言われず、にこやかに応対しておられました。先生のお人柄と思います。

私が、いつも感心していたのがLEC 会計大学院の節目の行事での諸井先生のご挨拶でし

た。申し訳ないのは、何を言われたかを忘れてしまい、具体的に書けないことですが、お年にもかかわらず、大変わかりやすく、内容のある話をされていました。これは、その時の入学生もみな感じていたことと思います。

最初に、先生が LEC 会計大学院で人との交わりを楽しんでおられたと書きました。人間、年を取るとだんだん、かつて仕事をした場所との関係が薄れ、社会との接触が少なくなっていく。その中で、LEC 会計大学院は先生にとっても新しい人間関係を作り、意見を

表明する楽しい場所であったのではなかったかと思います。中でも山本宣明先生（LEC 会計大学院教授）とは専門分野も近く、大変楽しそうに話をしておられた印象です。また事務局の人たちもよくお世話をしていたようです。

もし LEC 会計大学院が晩年の先生にとって、心地よい場所であったとすれば、先生の薫陶を受けたものとしては、大変嬉しいことです。

ご冥福を祈ります。